

一夜官女

司馬遼太郎



中公文庫

中公文庫 ©1984

一夜官女

一九八四年一月一〇日初版
一九八九年八月二〇日6版

著者 司馬遼太郎

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トレープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

ISBN4-12-201087-X

中公文庫

一 夜 官 女

司馬遼太郎著



中央公論新社

目次

一夜官女	5
雨おんな	49
女は遊べ物語	91
京の剣客	131
伊賀の四鬼	169
侍大将の胸毛	203
あとがき	272

一^{いち}
夜^や
官^{かん}
女^{じょ}

村のひがしには、葦が多い。

枯れた葦のなかを中津川が流れている。満潮のときには、葦の原をひたして川が逆流し、あたり一面に海のおいがみちる。葦のなかに、わの津とはよくいったものだ、と小若はおもった。小若は西のほうをみた。二里ばかりむこうの台地に、大坂城の天守閣が夕雲を背にして紫に浮きあがってみえた。

村を摂津野里村という。もっともその名を小若が知ったのは、二日前のことだ。

供の弥兵衛老人が旅に病んだために、村にただ一軒しかない旅籠の油屋治郎八方に足をとめて二日目になるが、この夕景がひどく気に入っていた。

(旅にいるせいかしら)

そうかもしれない。

街道のむこうに、森がある。

森に夕もやが立っていた。この村の鎮守である「すみよし明神」の森である。

その建物さえも小若には異風にみえるのである。もっとも住吉明神の信仰は摂津にかぎられたものだ。紀州の山里の郷土の家になれた小若の眼には鳥居の形までがめずらしい。

「御寮人さま。左様に障子をおあけなされると、お風邪を召しますぞ」

隣室からふすま越しに、供の弥兵衛老人が声をかけた。

陽が落ちたのか、急にあたりが暗くなり、風がつめたくなった。

「ほんと。なんだか、背筋まで冷えてきたような」

小若は、二階の障子をしめようとして、ふと手をとめた。眼の下の街道にひとりの男をみとめたのである。

男は、編笠をかぶって顔はわからなかったが、ひと目みて、目をそばだたせるほどのずぬけた体格をもっていた。

旅の武芸者ふうの男で、両刀を腰にしていなければ、野伏りとまちがわれるようなひどい風体だった。二月というのにすりきれた単衣に色あせた袖無し羽織をはおり、茶染めの革バカマをはいている。

(まあ)

薩摩

小若は、つつしみぶかい女だが、好奇心が人なみはずれて強い。

(どのようなお人であろう。このやどにおとまりなされるのか)

武芸者は、旅籠の軒先まできて、ふと編笠をあげ、二階の小若をみた。

それほど男の視線はつよかった。食い入るように小若を見つめ、しかも表情を動かさない。小若は、このように魅力にとんだ男の顔をみたのは、はじめてだった。

「どうなされました」

卷之九 雜事 四

「お熱は？」

ひたいに手を触れてやった。

「もったいのうございます。道中で病んでしもうたばかりか、御寮人さまに看病などをさせて申しわけござりませぬ。旦那さまが姫路で首を長くしてお待ちかねでござりましょう。あすには、なんとしても発たねばなりませぬ」

「むりなことです。かゆの二柄もたべられるようになってから発ちましょう。姫路へは、飛脚をたてて事情を知らせることにします」

「悲しや」

弥兵衛は、涙をこぼした。律義な老人なのである。

弥兵衛は、姫路城下いよつかで有名な医家である下沢しもざわ了庵りょうあんの用人で、このたびは、了庵の長子閑庵の嫁である小若の旅の供をした。

小若の実家は、紀州橋本在の郷土丹生喜左衛門方にぶきざえもんかたである。先月、紀州から急飛脚がきて、父の喜左衛門の危篤をつたえたので小若はおどろき、その日に姫路を発つほどに道中をいそいだのだが、実家についてみると、父は、すっかり元氣になっていた。

心配してただけに、病後のやつれもみえぬ父の元氣さをみて、かえって腹がたってしまった。

「おとうさまは、うそをおつきあそばしましたな」

父は、だまって微笑している。小若はその顔をみて、病氣の一件はうそにきまっている、とおもった。むすめの顔を見たさのたくらみだったにちがいないのである。

「むこ殿は、息災そくさいか」

と父はきいたが、小若はだまっていた。息災にはちがいない。

が、小若がこの遠縁にあたる姫路の下沢家に興入れこいしてくると、むこの閑庵には、独身時代からかこっているめかけがいることを知った。

小若が紀州からつれてきた乳母がかぎつけて教えたのである。しかし小若は、ほこりのつよいたちだったから、とりみださなかった。ただ、そのことを知って以来は、夫の閑庵への愛情が急に冷え、いまでは、寢所に夫が入ってくることさえ、身ぶるいするほどの嫌悪けんあくをおぼえるように

なっていた。

「仲がよいか」

と父がきいた。小若は、ただうなずいた。それだけで、父は他愛もなくよろこんだ。

数日実家に滞留して、小若は姫路へむかって発った。

途中とまりを重ねながら紀州街道を北上し、いったん大坂に出て、尼崎への道をとった。

大坂から播州姫路へゆくには、まず尼崎に出ねばならない。尼崎への道は、大坂の天神橋から十三へ出、神崎村へまわってから尼崎へ入るのが本街道だが、弥兵衛老人が、

「早道をつかまつりましょう」

といつて、大坂の西郊にある上福島村から海老江村、竜池の沼沢地を通過して中津川の川下をわたり、野里村、大和田村、尼崎という脇街道をとった。

ところが、中津川の渡し船に乗ったところから弥兵衛の顔が土色になった。大坂の旅籠でたべた「かますこ」がわるかったらしい。川へ吐いたが、あわせて熱も出、船が対岸についたころには、腰があがらなくなっていた。

やむなく小若は弥兵衛の体を船頭にかついでもらって、対岸の野里村へゆき、旅籠油屋で手当てしたのだが、病いは意外に重く、けさも、一晩のお湯をたべるのがやっとだった。

「弥兵衛、気がねをすることはありませぬ。小若は、この村が気に入っているのです。女の身で、家をそとにして旅に出るなどは、一生ないといつてもいいことですもの。体がすっかりよくなる

まで、ここで逗留とまりゆうしていきましょう」

「おやさしいお言葉を」

弥兵衛は、病んで気がよわくなっている。すぐ涙をにじませるのである。

小若は、その涙をみて、胸が痛くなった。べつに弥兵衛をいたわってのことではなかったからだ。

本心は、姫路に帰りたくなかった。一日でも長く、自由な旅の空にいたいのである。

二

小若が見た例の旅の武芸者ふうの男は、彼女が二階の障子をしめたあと、すぐ旅籠の土間に数歩踏みこんできた。小女に、

「た、いいはあるか」

「ある」

と小女は、土間の片すみを指さした。

牢人ろうじんは、足をあらひ、小女から新しいワラジをもらってはきかえると、

「とまるのではない。あとからわしを追うて来る者があれば、左様な者は見かけなんだといえ」
そういう捨てたまま、ワラジ代もおかずに土間を通って裏口へぬけようとした。小女があとを

追うと、ふりかえって小女の眼をのぞきこみ、

「なんぞ用か」

ニヤリとわらった。小女が、思わずからだのうちが熱くなったほどのふしぎな微笑だった。

「あの。――」

というとき、男の手が、小女の尻をなで、

「よい肉おきじやの。きつと、村の若衆どもに騒がれているのであらう」

小女はその手からのがれようとしたが、からだは、硬直したように動かない。さきほどの小女のばあいもそうであったように、男には、そういう魅力があるようだ。

「いま申したこと、頼うだぞ」

行こうとする男の手を、小女は必死の様子でとらえた。一度つばをのみこみ、かすれ声で、

「汝は、よいおひとじゃな」

「よいかどうかは知らぬ。ほめてくれた礼に小銭の幾枚か呉れてやりたいが、あいにく、びた錢もまたぬわな」

「もうし」

と声をかけたときは、牢人は足早に去り、夕闇が濃くなっていく竹やぶのむこう道に消えた。

そのあとすぐ、旅籠へ入ってきた平服の武士三人が、小女に、さきほどの男の人相骨柄をいい、

小聲で、

「その者、ここにとまっているであらう。たしかにこの旅籠に入るのを村の者が見かけている」

少女は知らぬ、といい、

「うそはつかぬ」

と、あとじさりした。

「この顔色は、居る、という色じゃ。家さがししてみよう」

一人が二階へあがり、小若の部屋のふすまを、カラリとあけた。

小若は、はっとした。さきほどから、あの旅の武芸者を思いだしていたために、ふとその男が訪ねてきたか、と思ったのである。が、すぐ、冷静になった。そのはずがなかった。この男は似ても似つかない小男だった。

「なんのご用でございましょう」

「これは」

相手は絶句し、

「人ちがいでござった。じつはこの宿に逃げこんだ牢人らうじんがおり、旅籠のゆるしをえて部屋あらためをしていたのでござる」

「お役人様でございますか」

このあたりは、大坂城に在城する豊臣右大臣家うだいじんけ（秀頼）の所領である。城下の船場あたりで盗賊を働いた者が、西国筋へ逃げるときに、この村を通ることが多いのであらう。

「ではない。大坂天満で道場をひらく天流の桜井忠大夫さくらいあやうだゆうどのの門人でござる。道場に不都合を働いた牢人を追うて、当村まできたが姿を見失うてしもうた」

「そのご牢人様の」

「おおその牢人の？」

「お名前はなんとおおせられます」

「小早川家牢人岩見重太郎いわみじゆうたろうと申す者じゃ。さてはそれらしき者をお見かけなされたのじやな」

「見かけませぬ」

あの編笠の武士にちがいない。

（岩見重太郎、きいたことがある）

あとで、となりの病室へ入って弥兵衛老人にその旨をいうと、

「はて、岩見重太郎」

老人もくびをひねり、

「そのお名前のお人ならば、先年、丹後たんごの天ノ橋立あまのはしだてにて仇討の助太刀をし、大井八左衛門以下手だれの兵法者ひょうほうしやを何人も討ちとった高名のご牢人ではありませぬか。しかしながら、それほどの高名のかたが、いかにご牢人とはいえ、いまだきこの野里村の街道を左様な風体をして歩いていようとは思えませぬ。おそらく、別人でございましょう。——もっとも」

弥兵衛はくびをひねり、